
隻眼の騎士

? マン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隻眼の騎士

【著者名】

?マン

NZマーク

【作者名】

【あらすじ】

剣や刀で戦う剣士、銃などで戦う銃士、魔術を操って戦う魔術師、傷を治す医士（誤字ではありません）が集まり治安を維持している『ギルド』によって人々が暮らしている。そんな時代に生きる少年とその仲間達の闘いが今始まろとしていた。

眼帯の少年

人々が集結し力を合わせて自分たちの大切な人達を自分たちの町を守っているのはいつからだろう。人々はギルドと呼ばれる組織を作りさまざまなことをこなしていた。

ある時は賊や魔物を討伐したり、またある時は難民の救助・救援をするなど社会に貢献している。危険区域の管理もギルドが行っている。

だがそんな危険区域に入ろうとしている少年がいた。その少年は茶色のフードを着ていて顔や体が見えない。そして、なんの躊躇いもなく危険区域の森の中に入っていく。

森の中はまだ昼間にもかかわらず薄暗く視界はいいとは言えないが少年はそんな中平然と進んでいく。

危険区域には狂暴な魔物が多く生息していて、そのため人が近寄らず自然のままで貴重な天然の物が手に入る。しかし、危険区域に入りそういう物を収集するのは本来ギルドの仕事である。

だが不思議なことに少年は一度も生息している魔物に会わず進んでいる。

少年は一人で薄暗い森の中を歩き魔物にも会わず目的地である泉に着いた。

そこはさつきまでの森とは違ひ光が差し込み神秘的な雰囲気がその場を包み込んでいた。

少年は辺りを歩き始めしばらくして薬草を探り始めた。少年は数ヶ所で薬草を採取し袋に入れると中央にある泉の所に行き水を汲み持ってきた水筒の中に入れる。

少年は外に出るためにまた薄暗い森の中に入つていく。薬草と水を持つているのだが足取りは来る時と変わらなかつた。

だが少年はさつき拾つた太い枝に火を点けて歩いていた。この森に生息している魔物は火を恐れる性質があるためこうしていれば魔物に襲われず安全に物を運ぶことができる。

そして少年は危険区域の中を魔物に遭遇せずに出てきた。少年は火の点いていた枝を森の入り口にある木の根元に置きその場を後にした。

町を目指し少年が歩いていると20人ほどの集団が突然現れた。
「待ちなーあるもの全て置いていきなそうすれば命は助けてやる！」

「運が悪かつたな俺たちレッドスコープオンに眼をつけられるなんて！」

少年の取り囲んでいる集団はレッドスコープオンといつこの辺りでは有名な盗賊団で通りかかった旅人を狙う輩達である。

「少し急いでいるから道を開けてくれないか。」

「てめえ誰に向かつてそんな口きいているんだ！」

盗賊の1人が少年に近づくと少年はすばやく足払いをして近づいた盗賊を転ばせる。

すると周りを囮んでいた盗賊達が一斉にサバイバルナイフなどの刃物を取り出す。だがその手は震えうまく握れていなかつた。

「やるやうに行かせてもらえないか。あんまり人を待たせたくないから。」

「うひー、やつちまえ！」

盗賊達は全員で少年に襲いかかる。しかし少年はギリギリのところで刃物を避け、逆に足を蹴りあげ盗賊達の握っている刃物を手から抜いた。

盗賊達は次々と手を蹴られうずくまるがまだ半分以上残っていた。

「顔を見せな！」

最初にやられた盗賊が不意に立ち上がり少年のフードを剥ぎ取つた。

しかし、盗賊達は少年の姿を見て驚いた。無駄のない筋肉の体、茶髪の髪、左目に眼帯をしているが整つた顔立ち。そして最も盗賊達が驚いているのは彼が身に付けていた物だつた。

「貴様、あの町のギルドか！分がわるい！退けー。」

盗賊達はそんな少年の姿を見ると逃げてしまつた。おそらく近くにギルドが潜んでいると思ったのだろうが他に誰もいなかつた。

少年はフードを被り直し何事もなかつたかのよう町に向かつた。

少年はまづ町に着くと薬屋を探した。

「ねえ、何か探しているの？」

小さな男の子が少年に声をかけたのだ。男の子の目線の位置まで顔を下げた。

「薬屋がどこにあるか教えてくれないか？」

「うん、いいよーそれよりお兄ちゃん眼どうしたの？」

少年は自分の顔を男の子の目線まで下げてしまつたので顔を見られるは分かつていてが自然とそつしてしまつた。

「君、名前は。」

少年は話を変えようと名前を聞く。

「僕、ロンってこうんだ。お兄ちゃんの名前は？」

「俺はレオナルド。レオナルド・シュバルクだ。」

「なんかカッコいい名前だねーじゃ薬屋まで案内するね。」

レオナルドはなんとか顔のことから話題をそりあことができた。だがなぜ自分が顔を見せるようなことをしたのか分からなかつた。

「「」が薬屋だよー。」

「ありがと、ロン。」

「じゃあねお兄ちゃんー。」

レオナルドはロンと分かれたとフードを被つている「」とを確認して薬屋に入る。

薬屋の中は種類豊富な薬や薬草が置いてあったがあまり数がなかった。それに店の中も綺麗とは言えなかつた。

「いらっしゃい。まあ数は少ないけど見ていいつてくれ。」

カウンターのところには老人が弱々しい声で応対してきた。

「あのどうしたんですか?」

「旅の人かな?実は最近盗賊達のせいであまり薬や薬草が仕入れできなくて店もこの通りだ。」

「ギルドの人達はどうなんですか?」の町にもこますよね。」

「ギルドはどこの町にも必ず一つは存在していて治安を守つていて。いない町といつのがあるかどつかである。」

「いるにはいるんじやが、最近は盗賊達を恐れて夜逃げする隊士がいると聞く。」

レオナルドはいつも町を見捨て逃げるそんな隊士を憎んでいた。

だがレオナルドは口には出さず薬草の入った袋と水筒をカウンターの上に置く。

「お前さん」の薬草と水を一体どうやって？」

老人は袋の中身を見てレオナルドを見る。

「気にしないでください。役に立てば思つて持つてきただものですから。」

レオナルドが店を出ようと老人が急いで駆け寄り調合済みの薬を渡した。

「たいしたお礼ではないがどうか貰つてください。」

「こんな大切なものを、ありがとうございます。」

レオナルドは薬屋を出ると町役場に向かつた。町役場には必ずギルドのメンバーがいてレオナルドは話をしに向かつていた。

薬屋と町役場の距離は長くなく歩いて10分ほどだった。町役場は外も中もそれほどひどくなかったが押し潰されてしまいそうな雰囲気だつた。

「ギルドの人を話したいんですけどよろしいですか。」

受付の人は突然フードを被つた人が声をかけてきて驚いていたがすぐに案内された。レオナルドはあつさり通してしまうのは無警戒だと思った。

レオナルドは応接室に案内され中に入ると既にギルドのメンバーが数人待っていた。

「君が私と話をしたいという人か。で話とはなんだ。」

レオナルドはフードから顔を出した。そして名を名乗った。

「私レオナルド・シュバルクと申します。単刀直入に聞きます。レッドスコーピオンへの対策は何か考えているんですか？」

「恥ずかしい話だが我々は今やこの町を守るのが精一杯でとてもそこまで。」

「ではもし奴らが攻めて来たらこの町を守ることができますか？」

その質問に1人のメンバーが怒鳴る。

「よそ者がいちいち、私は誇り高きギルド必ず守つてみせる！」

「最近は夜逃げする者がいると聞きましたが誇り高きギルドならなぜ！」

レオナルドの言ったことに誰も反論できなかつた。

「なりばじひじとー勝手な」とばかり言つた！

「力を合わせて戦えばいい！それともこの町のギルドには戦うこと恐れる人しかいないんですか！」

すると椅子に座つていたメンバーが立ち上がつた。

「確かにあなたの言ひ通りなのかもしれない。しかし私達の士気は下がつてしまつてゐる。とても勝てるとは。」

その時外で爆発が起き直後に悲鳴や逃げ惑つ人達の足音が響き始めた。

「盗賊だ！ 盗賊の襲撃だ！」

部屋にいたメンバーはレオナルドを含めて全員外に出た。そこに報告が来た。襲撃はレッドスコープオンで今は町の中央の広場にいるという情報だった。

「それで奴らはなんと。」

「はい、大人しく降伏しこの町を明け渡さえすればなにもしないと言つています。」

「いいや奴らと今こそ決着をつける。」

報告してきた者だけでなくその場にいたメンバーが降伏を考えていたようで驚きを隠せなかつた。

「いいんですか隊長！』

「町を人々を守るにはやるしかない！ ありがとう少年よ、私は大切なことを忘れていたのかも知れない。少年よ我々に手を貸してくれないか！』

「喜んで。』

レオナルドはこうなることを予期していたかのよつだつた。レオナルド達は町の広場に急いだ。

広場は盗賊達が占領していて逃げ遅れた多くの住民が人質になつていた。

「どうします、住民が人質になつていては。」

人質がいる状況で下手に相手を刺激すれば犠牲者が出てしまつのでどう出れば良いか途方に暮れていた。

「私が奴らの注意をひきつけますのでその間に住民をお願いします。」

「一人で大丈夫か?」

レオナルドは反対側に走つて行つた。

しばらくすると広場で動きがあつた。レオナルドが盗賊達にわざと自分の存在を認識させギルドのメンバーがその背後から奇襲をかけたのだ。

盗賊達はまさかこの町のギルドが降伏せず戦う選択をするとは思つておらずあっさりと人質を解放されてしまった。

「よくもー野郎共、全員皆殺しにしろ!」

広場はギルドと盗賊団との大混戦になつた。初めは若干盗賊団が押していたがギルド側の一人によつて戦況は変わつた。

レオナルドは一騎当千の如く剣一本で次々と盗賊を倒していく。あつという間に盗賊達の数は半分以外に減っていた。

「またしてもあんな若造に！退けー、退け！」

だがもう盗賊達は周りを囲まれ退路を絶たれてしまっていた。

「やりましたね隊長！」

「あああの少年のおかげだな！」

しかしそまだ終わっていなかつた。隠れていた別部隊が背後からギルドに奇襲をかけたのだ。だがそれも失敗に終わった。

レオナルドがギルドが気がつくのと同時に奇襲部隊の前に立ちふさがりまたしても一人でカタをつけてしまった。

ギルドは勝ちどきを上げ本当の勝利を得たのだった。

「ありがとうございました、君のおかげで勝利することができた。もし良かつたら我々のギルドに入らないか？見ただけでここにも所属していいなみたいだけど。」

「いいえ、せっかくですがお気持ちだけで十分です。ではまだどこかで。」

「隊長！少年はどうした？」

「風のような少年だな。レオナルド・シュバルク、いつかまたど

いかで会つかもしれないな。」

レオナルドは風のよひにその町を去ってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8936y/>

隻眼の騎士

2011年11月26日21時51分発行